

主要地方金沢井波線道路改良工事
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 (I)

富山県福光町

梅原胡摩堂遺跡

1999年3月

福光町教育委員会



梅原胡摩堂遺跡 17地区の遺構

序

福光町の北東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯であります。東海北陸自動車道建設工事、梅原地区・県営ほ場整備事業関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県道金沢井波線改良工事に伴う梅原胡摩堂遺跡の発掘調査です。県道の拡幅にあたる部分の本調査を実施しました。調査の結果、中世後期の掘立柱建物、土坑、区画溝が確認されました。

また、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、石臼などが出土地しました。本書は、その調査結果をまとめたものです。出土品とあわせて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバーパートナーズセンター・富山県福野土木事務所及び地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成11年3月

福光町教育委員会
教育長 石崎栄一

例　　言

- 1 本書は、主要地方道金沢井波線道路改良工事に伴う富山県福光町梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成10年4月9日から同年7月7日までである。調査面積は1,330 m²である。
- 2 調査は、富山県土木部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長森田智之、文化係主任佐々木隆が調査業務を担当し、生涯学習課長西村勝三が総括した。調査担当及び本書の執筆は生涯学習課主任佐藤聖子、深田亜紀が行った。
- 4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。
安念幹倫・岸本雅敏・境洋子・大平奈央子・久々忠義・太崎勇・高橋真実・橋本正春・林敏三
宮崎順一郎・宮田進一・山本正敏・吉田敏信（敬称略・五十音順）
- 5 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。
- 6 調査参加者は次の通りである。
井口富士雄・井口義雄・井口良吉・奥野豊次・棚田俊雄・棚田正男・中村俊雄・溝口外雄
山田善之・荒井とよ・井口艶子・井口よし子・大井川あや子・大井川花枝・大島笑子
片田敏子・大門そと・橋本華子・水口浜子・溝口秋子・溝口あさ子・山田きみ子
山道文子（現地作業員）木下真由美・西川和美・安田富子（遺物整理作業）

目　　次

I 位置と環境	1	第4図 区画溝SD11	6
第1図 位置と周辺の遺跡	1	IV まとめ	8
第2図 遺跡の範囲と調査区位置図	2	参考文献	8
II 調査に至る経過	3	第5図～第9図 17地区の遺構(1)～(5)(9～14)	
第3図 地形と区割	3	第10図～第13図 17地区の遺物(1)～(4)(15～18)	
III 調査の概要	4	図版1～図版5 17地区の遺構(1)～(5)	
1. 調査の経過	4	図版6～図版12 17地区出土遺物(1)～(7)	
2. 調査の方法	4	報告書抄録	
3. 調査の概要	4	付図 梅原胡摩堂遺跡17地区・遺構配置図	

I 位置と環境

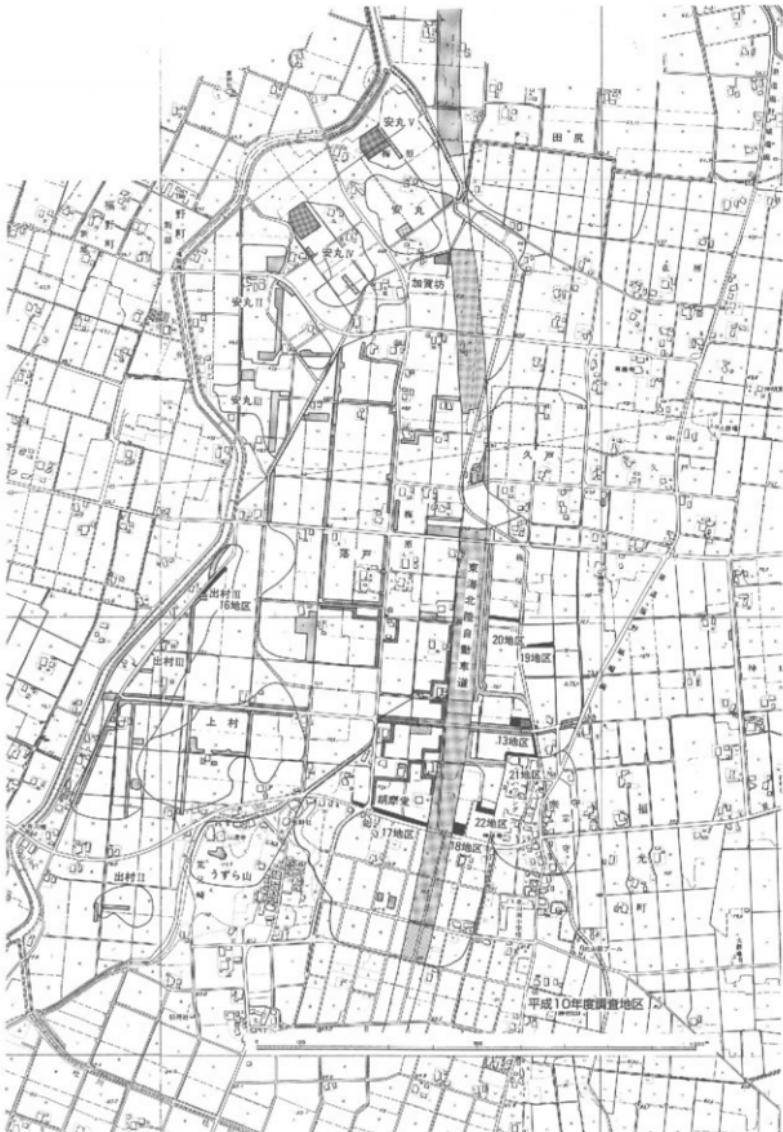
富山県福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部端に位置する。町の西側から南側にかけては、養老三年（719年）、泰澄大師によって開山されたといわれる靈峰医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。上平村と接する南側に位置する大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

梅原胡摩堂遺跡は、小矢部川の支流である大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に位置する。標高70m前後を測る当遺跡の周囲には、梅原安丸遺跡群、梅原加賀坊遺跡、梅原出村遺跡群、梅原上村遺跡、梅原落戸遺跡、田尻遺跡、久戸遺跡が密集している。このうち、梅原安丸遺跡群、梅原加賀坊遺跡、田尻遺跡、久戸遺跡は、東海北陸自動車道を建設する際発掘調査が行われ、12世紀中頃から18世紀にかけての大集落跡が発見された【富文振1994】。南後方にうづら山遺跡、宗守遺跡、竹林I遺跡、竹林II遺跡、東殿遺跡、徳成遺跡などの縄文時代を中心とした遺跡が存在する。また梅原胡摩堂遺跡6・7地区からは弥生時代中期の土器・管玉・石鏃が出土し、梅原安丸III遺跡では古墳時代の堅穴住居跡1棟を検出している。

文献資料では、古代には福光町の一部が砺波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家である梅原坊があった。



第1図 位置と周辺の遺跡



第2図 遺跡の範囲と調査区位置図 (S=1/10,000)

II 調査に至る経過

福光町梅原地区においては東海北陸自動車道建設、県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業の施工に伴い、遺物分布調査、試掘調査を行った結果、地区全体の約8割が繩文時代から中近世に続く集落等が存在する埋蔵文化財包蔵地と確認された。よって、この結果に伴い文化財保護側と開発側の間ではたえず協議が行われ、やむを得ず工事施工により遺跡が破壊される、または永久に調査する機会を失ってしまう箇所については、県埋蔵文化財センター（以降「センター」）、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所（以降「財団」）、町教育委員会（以降「町教委」）がそれぞれ本調査を実施し、遺跡の様相を明らかにしてきた。

さて、主要地方道金沢井波線（以降「県道」）は、梅原地区南部を東西に横断している県営の幹線道路である。平成元年から、この県道については拡幅を伴う改良計画があげられており、梅原地区内でも埋蔵文化財包蔵地外の部分については工事が行われていた。しかし、熊野社付近から聴信寺付近については、前述の調査により中世から近世にかけての大集落跡が確認された梅原胡摩堂遺跡内にあたり、すでに用地買収も終了していたものの、本調査の実施までには至らなかった。だが、調査着手を要望する地元の意志もあり、平成10年度に本調査を実施することとなった。

本調査を実施したのは、東海北陸自動車道西側で、県道が北側に拡幅される部分においてである。具体的には、東海北陸自動車道西側の側道に接する部分から、町道竹林梅原線に接する部分と、同町道より西に約30m部分である。県道付近の現況としては、2車線の車道部分北側に歩行者用道路が3m幅で設けられており、その北側に9mが拡幅分として用意されている。その拡幅分のうち、自動車道から西に約50m部分は、東海北陸自動車道建設の際の財団による本調査時に、ダンプカーの乗入れを容易にするために、仮舗装を施している。周辺の現況は、畠と宅地が主であり拡幅部分のさらに北側については、県営は場整備事業の施工により大区画の田面が広がっている。当初予定では、県道に伴う歩道部分も平成10年度の本調査対象としていたが、この歩道の通行者が多いこと、調査中の代替地の用意が困難であることから、拡幅部分においてのみ本調査を実施することとなった。調査面積は、町道竹林梅原線から東海北陸自動車道隣接部分までが1,166m²、同町道から西側部分が164m²の合わせて、1,330 m²である。



第3図 地形と区割 (S=1/2,000)

III 調査の概要

1. 調査の経過（第2図）

梅原胡摩堂遺跡は、前述にもある東海北陸自動車道の建設に伴い昭和57年にセンターが行った分布調査で発見された。昭和63年には、自動車道路線部分にてセンターが試掘調査を行い、平成元年から同4年まで財團が55,750m²の本調査を実施している。

ほ場整備事業に伴う梅原胡摩堂遺跡の調査は、平成7年に自動車道東側87.6haの試掘調査をセンターが行った。翌8年度には、遺跡中央西寄りで用排水路付け替え工事が施工される11地区：1,035m²と、中央東寄りの田面削平工事部分13地区：487m²の2か所での本調査を町教委が実施した。9年度には、梅原地区の東側を流れる権現堂川改修工事に伴い、川の新しい着工部分とそれに付随する水路部分、用排水路付け替え工事部分、合わせて3,145m²の本調査を行った。

また、胡摩堂遺跡中央部分を東西に通過する県営農道田中・梅原線整備拡幅に伴っては、平成5年度から8年度にかけて合計3,470 m²の本調査を実施した。

今回の調査地区は、東海北陸自動車道西側、県道拡幅部分であり、17地区とした。17地区は、遺跡内では中央南寄りにあたる。17地区的調査は人力による除去土を排土する場所の確保が困難であったことなどから、2回に分けて行った。町道竹林梅原線から東に70m部分を境とし、西部分の調査を行っている間、残りの東海北陸自動車道までの部分を排土場所とし、残りの東海北陸自動車道までの東側部分の調査時には、調査の終了した西部分を排土場所にあてた。

2. 調査の方法

調査は、まず重機で遺物包含層の上面までの仮舗装、道路敷きの山砂、旧耕作土の除去を行った。その後、調査区に合わせおおよその東西方向・南北方向に基準杭を10mごとに設置し、調査区割を行った。区割は、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層掘削・遺構検出・遺構掘削等は調査員及び作業員が行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリコプターにより撮影した写真から図化した。

3. 17地区の概要

(1) 地形と層序（第3図）

17地区は海拔約77.10～77.30mである。地形は、調査区東から西にむかってゆるやかに下降し、調査区の西約110mでは段丘崖となっており、遺跡の境目にあたる。調査区部分は、削平をうけており、地表から地山面（遺構確認面）までの深さは、20～30cmで、旧耕作土、黒褐色土（中世の包含層）の順に堆積していた。ただ、自動車道寄りの仮舗装部分においては、旧耕作土の上に山砂を1m程盛った状態であった。地山は、黄褐色砂礫層であり、中世の遺構はこの層に掘り込んでいた。

(2) 遺構（第5図～第9図、付図、図版1～5）

中世後期（15世紀～17世紀）の掘立柱建物2、土坑40・井戸45・溝11・ピット群等がある。

A. 中世

掘立柱建物・SBO1（第6図、図版2）

調査区の西側、Y70～Y74部分に位置する。3間(8.1m)×2間以上で、東西に柱穴を4基検出した。南北の軸は東に20°ふれている。面積は約24m²以上と考えられる。柱穴群の掘方はほぼ円形で、直径40～50cmを測る。深さは約40cmで、黄褐色土に掘り込んでいる。

埋土はやや粘質の黒褐色土である。建物の柱穴からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

土坑・SK14～19（第6図、図版2）

調査区西側、Y73～Y76部分に位置する。6つの土坑は互いに切り合っている。

SK14は3m四方、深さ約30cmの方形土坑である。SK15は東側でSK16に切られているが、3m四方、深さ約30cmでSK14とほぼ似た形態である。SK14・15とも壁の立ち上がりは浅く、床面は平坦である。埋土は黒褐色土にオーリーブ褐色土が混ざったものである。SK15より15世紀後半の中世土師器・皿が出土している。

SK16は北側は調査区外へ伸びており、全容は分からないが、南北4m以上×東西3.4m、深さ約40cmの長方形の土坑である。SK15・19をそれぞれ西側、南側で切っている。壁の立ち上がりはしっかりしている。埋土は、やや粘質の黒褐色土に、炭が混じったものである。出土遺物には、瀬戸美濃・端反皿、土師質製品がある。16世紀前半ころとみられる。

SK17は北側をSK14に、東側をSK18に切られている。1辺2.6mの方形土坑であろうか。深さは約30cmである。中世土師器・皿、瀬戸美濃・天目茶碗が出土している。遺構の時期は、15世紀後半とみられる。

SK18は1辺3.6m、深さ約60cmの方形土坑である。SK17を切っているが、東側で隣接するSK19との切り合いは、確認できなかった。土坑内には、SE20・21・25の3基の井戸が存在し、3基ともSK18を切っている。SK19は、南北3.8m×東西約3m、深さ約25cmを測る。北側をSK16に切られている。SK18・19の北側では、集石を検出している。集石付近からは、瀬戸美濃・天目茶碗や石臼が、他には中世土師器・皿、瀬戸美濃・端反皿が出土している。出土遺物と切り合いの関係から、SK18・19とも16世紀前半である。

SK31（第8図、図版4）

調査区中央東寄り、X9、Y115～116部分に位置する。南北方向が3.6m×東西方向が3.8mの不整形の土坑である。南東に溝S D09が付随している。上坑内は、全体に石を敷き詰めている。埋土は焼土が多く混じる黒褐色土である。埋土、石を取り上げると、床面にピットを5つ確認した。フイゴの羽口破片、鉄滓が大量に出土している。近辺では、財閥調査の際に鍛冶関連の遺構として、SD9116・9117・9126・9192、多量の焼土と炭化物が出土したSK8960・8961が検出されている。SK31は、これらの遺構の真東約30m部分にあたる。これらのことから、この土坑も鍛冶に関連したものと考えられる。

SK34～37（第7・8図、図版3）

調査区中央部Y100～Y109部分に位置する。SK34はX5～7、Y106～Y109にある。南側が調査区外に伸びているため全容は分からないが、東西約3.5m×南北3m以上の、深さ60～70cmの長方形の土坑である。壁はしっかりと立ち上がり、地山が黄褐色砂礫であることから床面も平坦でしっかりしている。埋土は、粘りのある黒褐色土に鉄分の沈着が顕著にみられた。出土遺物には、瀬戸美濃・天目茶碗、漆椀がある。

SK35はY103～Y105部分に位置する。北側が調査区外に伸びている。東西方向5m×南北方向3m以上、深さ50cmを測る。壁の立ち上がりはしっかりしている。埋土は、やや粘質の黒褐色土に5cm人の小石が混じる。また底部近くには、黄褐色砂礫が混じっていた。出土遺物には、珠洲・甕、すり鉢、越中瀬戸・皿がある。

SK36は、Y101～Y102部分に位置する。東西方向3m×南北方向3.5m、深さ20～40cmを測る。埋土は、やや砂質の黒褐色土で、15～20cm人の小石が多く混じる。土坑北東隅には、砂質の黄褐色土が多かった。出土遺物には、珠洲・甕、土師質暖房具がある。

SK37は、Y105付近に位置する。南側は調査区外へ伸びている。東西方向4m×南北方向2m以上、深さ40～50cmを測る。SK34と同じく、埋土は黒褐色粘質土で、床面は平坦である。出土遺物は無い。

SK30・40・SX01 (第5図、図版4)

調査区東寄り、Y116～Y125部分に位置する。SK30は、北側が調査区外へ伸びているが、東西方向5m×南北方向5m以上、深さ約60cmである。埋土は、上面から下に約30cmの範囲で、地山層にあたるやや粘質の黄褐色土が堆積しており、その下は鉄分を含む黒褐色粘質土である。このSK30と西側で接するのがSX01である。SX01は、東西方向9m×南北方向3.3m、深さ約50cmである。上面から下に約20cm部分には、やや粘質の黒褐色土があり、その下は灰褐色または青灰色の粘質土が堆積している。床面は平坦だが、水が湧いている。SK30とSX01の間には、石列が2組存在する。石の面はSX01のほうにそろえている。SX01の東側に位置するのが、SK40である。これも北側が調査区外へ伸びている。東西方向2.2m×南北方向3.5m以上、深さ約30cmを測る。SK30と同様、埋土の上面には黄褐色砂礫層が堆積している。出土遺物には、珠洲・甕がある。

これらの3つの遺構は、東西に細長いSX01の両端に、南北に長いSK30・40が位置し、北側に向かってコの字状の区画を形成している。

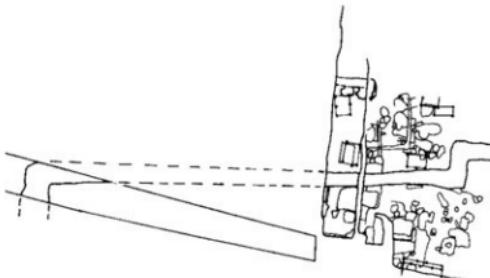
SX02 (第9図、図版4)

調査区東側、Y125～Y128部分に位置する。南北とも、調査区外へ伸びており、全容は分からない。南北方向6m以上×東西方向約5m、深さ約50cmである。埋土は、上から中程がやや砂質の黒褐色土で、床面に近くなると黒褐色の粘質土となる。検出時、上面には石が敷き詰められており、そのなかには石臼（上臼）、北側調査区境界には、礎石状の方形の石が配置されていた。出土遺物はその他に珠洲・すり鉢、瀬戸美濃・天日茶碗がある。

SE20・21・23～27 (第6図、図版2)

前述のSK17・18・19内に位置する。SE20・21・25はともに素掘井戸だが、上面に平均約20cm大的石を放射線状に丸く組んでいる。直径は約1～1.2mであり、SE21は丸く組んだ石組の内側も同じ大きさの石で埋めている。また、SE25は石組に五輪塔・空風輪が混じっていた。石を取り外したところ、掘方の直径は60～80cmの円形、もしくは楕円形を呈しており、埋土は黒褐色土にオリーブ褐色土が少量混じったやや砂質のものであった。深さはSE20が約1.9m、SE21が約1.2m、SE25が約1.8mであった。SE21からは、中世土器、皿、25からは五輪塔・空風輪2、水輪1が出土している。前述のとおり、この3基の井戸はSK18・19を切つているため、土坑より若干時期が新しく、16世紀前半から、中頃にかけてのものとみられる。

SE23・24はSK18・19の南側に隣接している。やはり、素掘井戸で、掘方の直径は約60～80cmの楕円形を呈している。深さは、SE23が約2.1m、SE24が約1.9mである。



第4図 区画溝SD11

SE23からは石鉢、24からは石臼・土臼が出上している。SE26・27は、SK18の北側に位置する。どちらも直径約60cmの円形の素掘井戸である。深さは、SE26が約1.9m、SE27が約1.3mである。SE26が27を切っているが、SK18の集石を取り除いた後にこの井戸を検出したことから、SK18と同時期16世紀前半か、少なくともSE20・21・25より時期が古いものとなる。出土遺物は無い。

区画溝・SD03~05・07 (第9図、図版5)

町道の西側、離れた調査区内に位置する。SD03・04はY45~Y48部分に位置し、SD03は幅約3.8m、深さ約20cm、04は幅約1.2m以上、深さは約25cmを測る。SD03が04を切っている。SD05・07は、Y40~Y45部分に位置する。SD05は、幅約1m、深さ平均30cm、07は幅約30cm、深さ平均約10cmを測る。SD03・04は、北側が調査区外へ伸びており、SD05・07は西側が調査区外西へ伸びている。SD03・04は、SD05・07と直角に交わり、SD04がSD05・07を切っている。埋土は、粘質の黒褐色土が主だが、SD04に関しては黄褐色土、暗灰黄色土が堆積していた。SD05と07の間は、地山が黄褐色砂砾で、そのうえには暗オリーブ褐色の砂の層が敷き詰められ、堅く踏み締められた感がある。道状遺構であろうか。出土遺物が無いため、遺構の詳細な時期は不明である。

区画溝・SD11 (第4図、図版3)

Y93~Y101部分に位置する。幅約5m、深さ約50cmを測る。埋土は、黒褐色あるいは黒色の粘土であった。溝は、Y94部分で直角に屈曲しており、東と南へのびている。東西南北の方向にほぼ添っている。財閥調査時の、SD7600の延長とみられる。SD11より東側を区画していることになる。

(3) 遺物 (第10~13図、図版6~12)

古代、中世のものが整理箱で20箱ある。

A. 古代

SD06 (1)

1は須恵器・高台杯である。9世紀中頃から後半か。

B. 中世

SK15~19・25・31・32・34・35・36・40 (2~26)

2 (SK15)、6 (SK17)、9・10 (SK18) は土師器の皿である。2はロクロ土師器、6・9・10は非ロクロ土師器である。2・6は15世紀後半から16世紀前半、9・10は16世紀前半である。3・4 (SK16)、13 (SK18)、14 (SK19) は瀬戸美濃・端反皿である。4には見込みに菊の印花がある。5 (SK16) は、土師質密器である。7・8 (SK17)、11・12 (SK18) は瀬戸美濃・天日茶碗である。

15 (SK25) は、青磁・稜花皿である。14世紀後半~15世紀後半にあたる。17 (SK32) は青磁・盤である。内面に溝状のへこみがある。14世紀初頭~14世紀後半にあたる。16 (SK31) はフイゴの羽口である。18 (SK34) は瀬戸美濃・天日茶碗である。

19 (SK35)、24 (SK36)、26 (SK40) は珠洲・甕である。19、24はV期、26はV期、もしくは、VI期にあたる。21 (SK35) は珠洲・すり鉢、22・23 (SK36) は珠洲・甕である。20 (SK35) は越中瀬戸・皿、25 (SK36) は土師質の暖房具である。

SX02 (27・28)

27は珠洲・すり鉢である。28は瀬戸美濃・天日茶碗である。

SE05・13・21・31・38 (29~33)

29 (SE05)、32 (SE38) は土師質・すり鉢である。30 (SE31) はフイゴの羽口、31 (SE13) は珠洲・すり鉢である。V期にあたる。33 (SE21) は非クロ土師器・皿である。16世紀前半にあたる。

SD06・P279 (34・35)

34 (SD06) は珠洲・すり鉢である。VI期か。35 (P279) は唐津・皿である。

包含層 (36~47)

36は土師器・灯明皿である。口縁部に煤の付着がある。15世紀後半にあたる。37・39・40は珠洲・甕であり、38・41は珠洲・すり鉢である。37はV期、39・40はIV期にあたる。42・43は青磁・椀である。15世紀後半にあたる。44は瀬戸美濃・天目茶碗、46は青磁・椀である。見込みに「好」の字がある。45は伊万里・椀、47は土師質製品である。

石製品・木製品 (48~64)

48はSK32出土の石鉢である。両側に1辺5cmの方形の突起がある。49はSE出土の石臼・下臼である。50・51はSE18出土の石臼・下臼と石鉢である。52はSE23出土の石臼・上臼、53はSE24出土の石鉢である。片口がついている。54~56はSE25出土の五輪塔である。54・55は空風輪であり、56は水輪である。57はP53出土の石鉢である。58はP130出土の石臼・上臼である。59・60はSX02出土である。59は石臼・上臼であり、60は約27cm四方のサイコロ状の石製品である。上面胴には直径6cm、深さ約2cmの円形の掘り込みがある。礎石の類であろうか。61も礎石の一種である。60と違い、板状である。50・51・53・57~59は、町西側に位置する桑山の桑山石を加工したようである。62はSK34出土の漆椀、63はSK35出土の建築部材、64はSE25出土の桶底板である。

IV まとめ

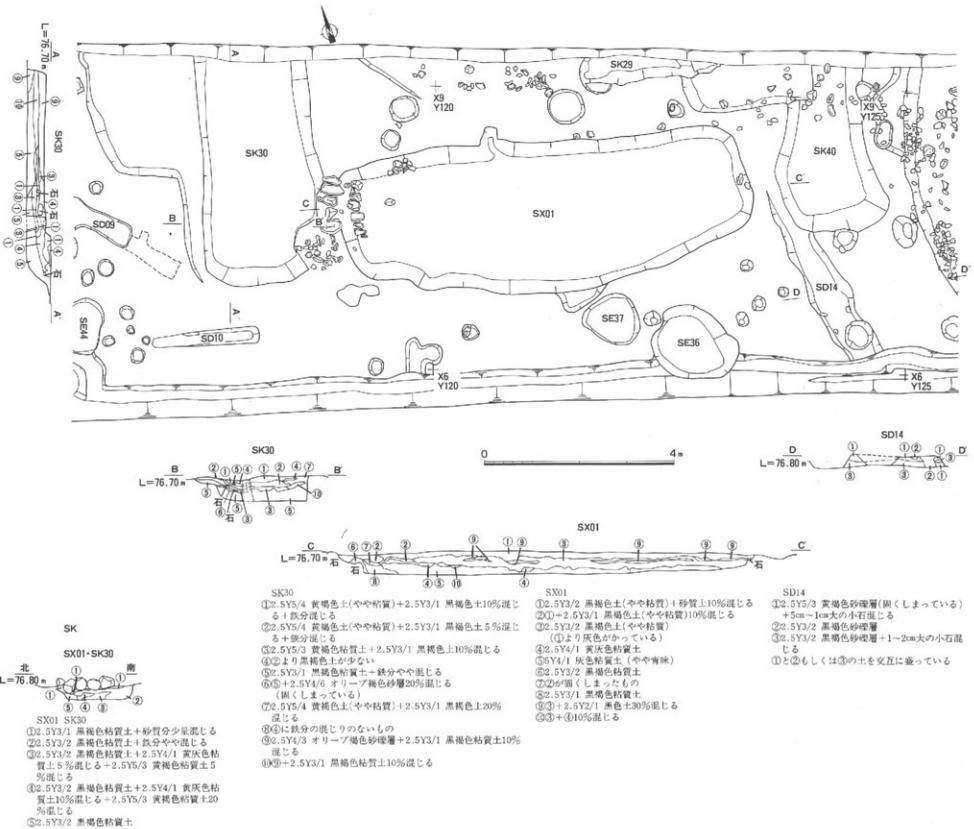
1. 今回の調査地区は予想以上に遺構の密度が濃く、特にSD11から東側にかけては、土坑、井戸の検出が多かった。この区画溝SD11内では、焼土、鉄滓、フイゴの羽口の出土が多く、一帯が鍛治に関連した遺構である可能性が高いことがわかった。
2. 検出した井戸に関しては、図示しなかったがすべて素掘で円形のものがほとんどであった。その深さは、平均で2m、深いもので3mに達するものもあった。ただ、このなかには似た形態の井戸が3基等間隔で並んで検出されたものもあり (SE39・40・41)、違う遺構の可能性を改めて考える必要性がある。
3. 遺物は、中世期以外のものがほとんど無く、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸など中世でも後半に属するものが多かった。また、フイゴの羽口、鉄滓といった鍛治関連遺物、井戸からの石製品、特に直径が30cmを超える石臼の出土が目立っていた。

参考文献

桂書房1997『中近世の北陸』

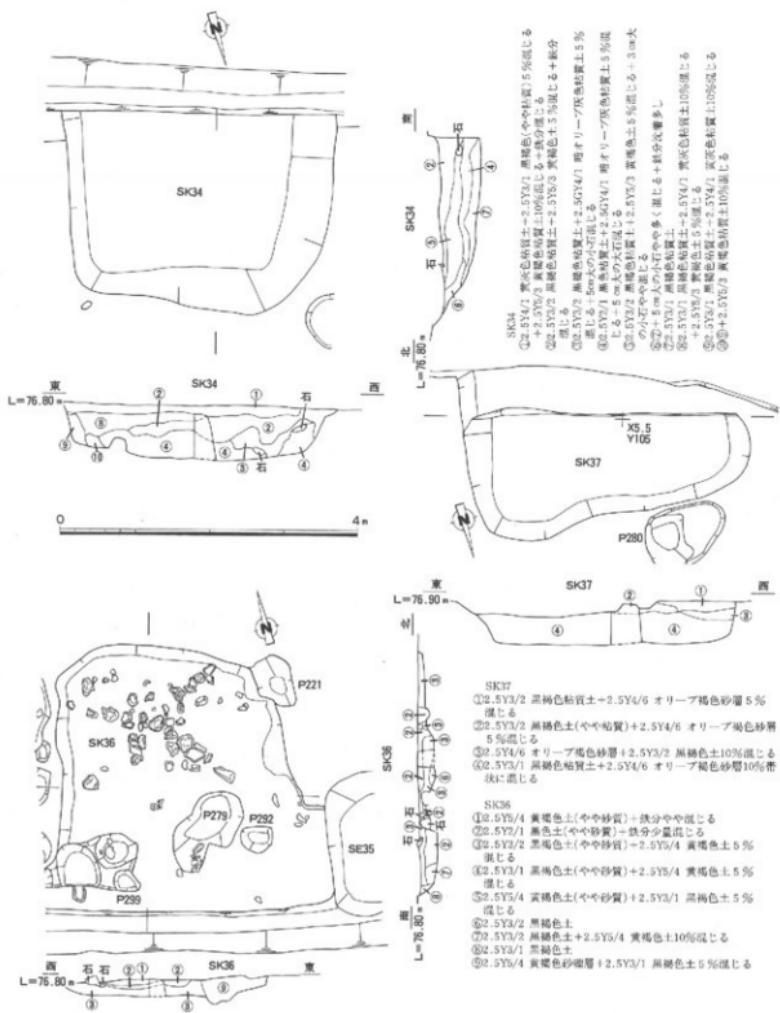
財団法人 富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』

財団法人 富山県文化振興財団1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』

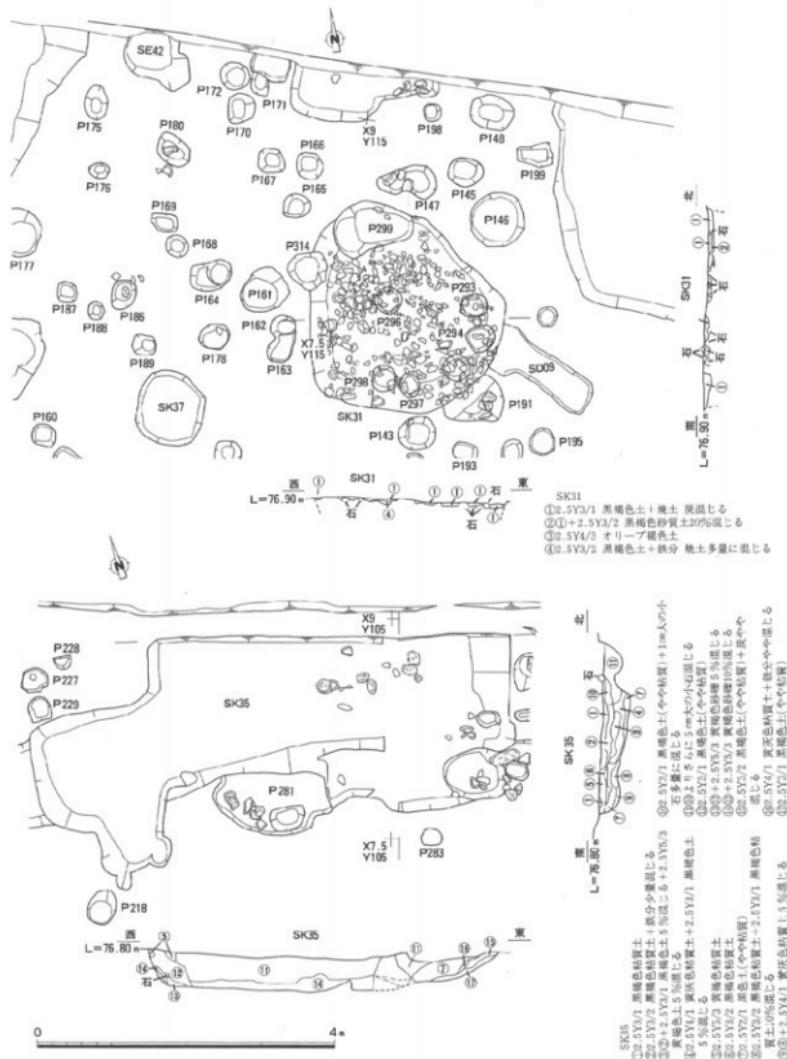




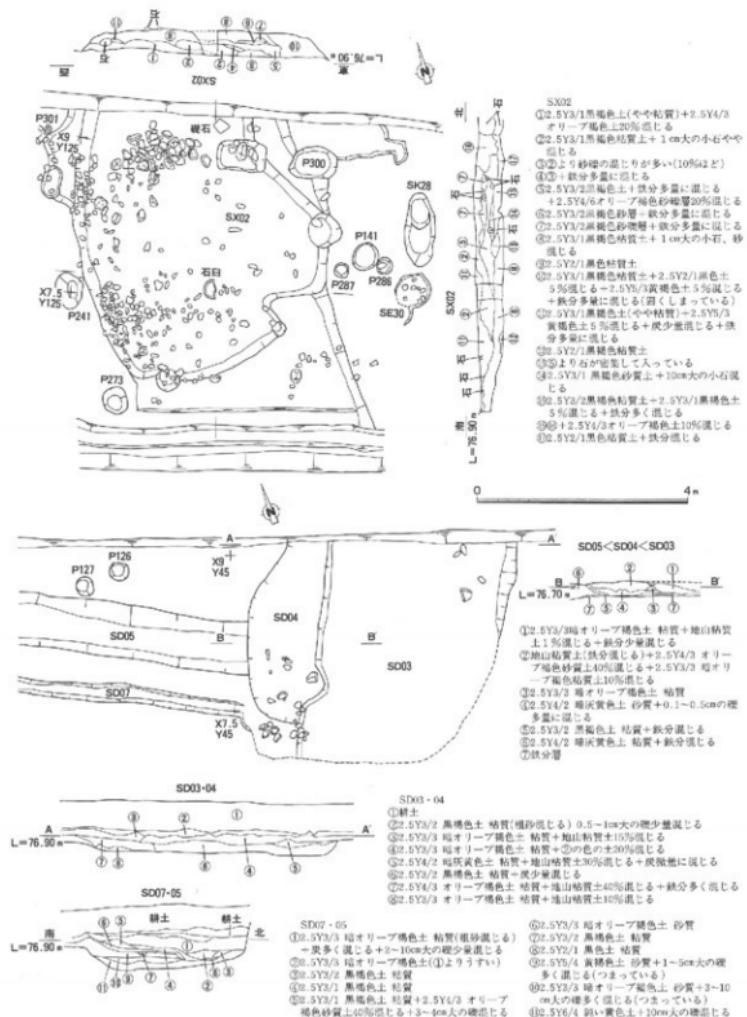
第6図 17地区の遺構 (2) (1:80)



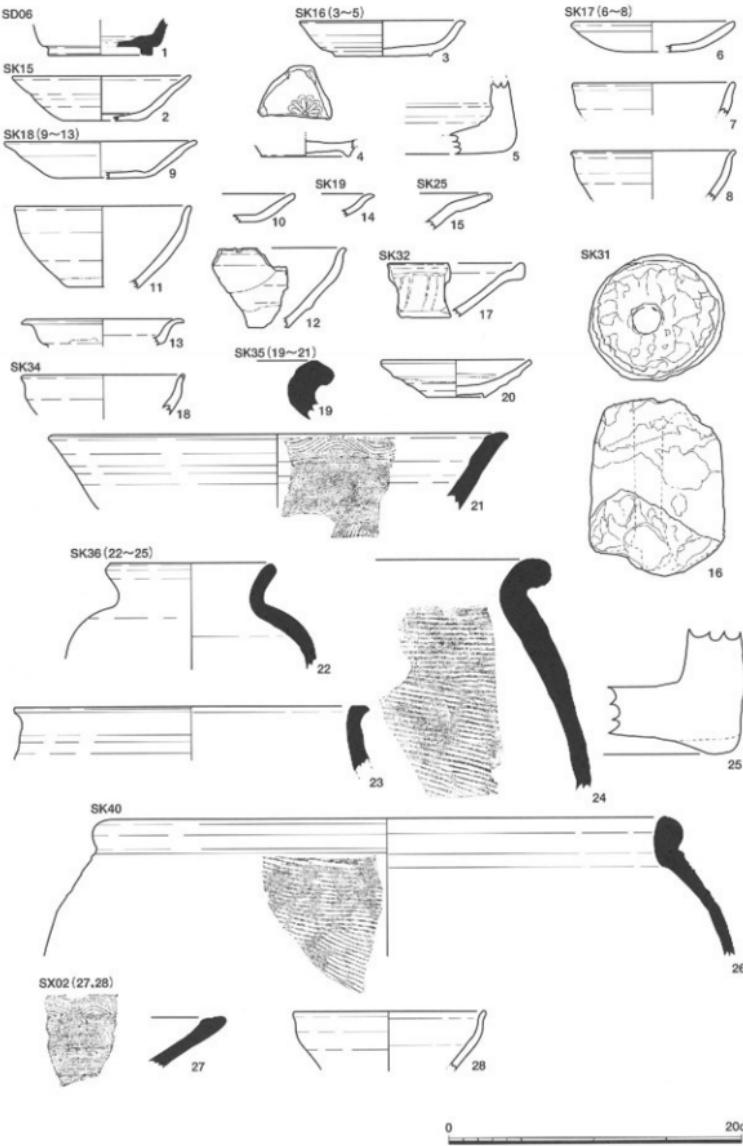
第7図 17地区の遺構 (3) (1 : 60)



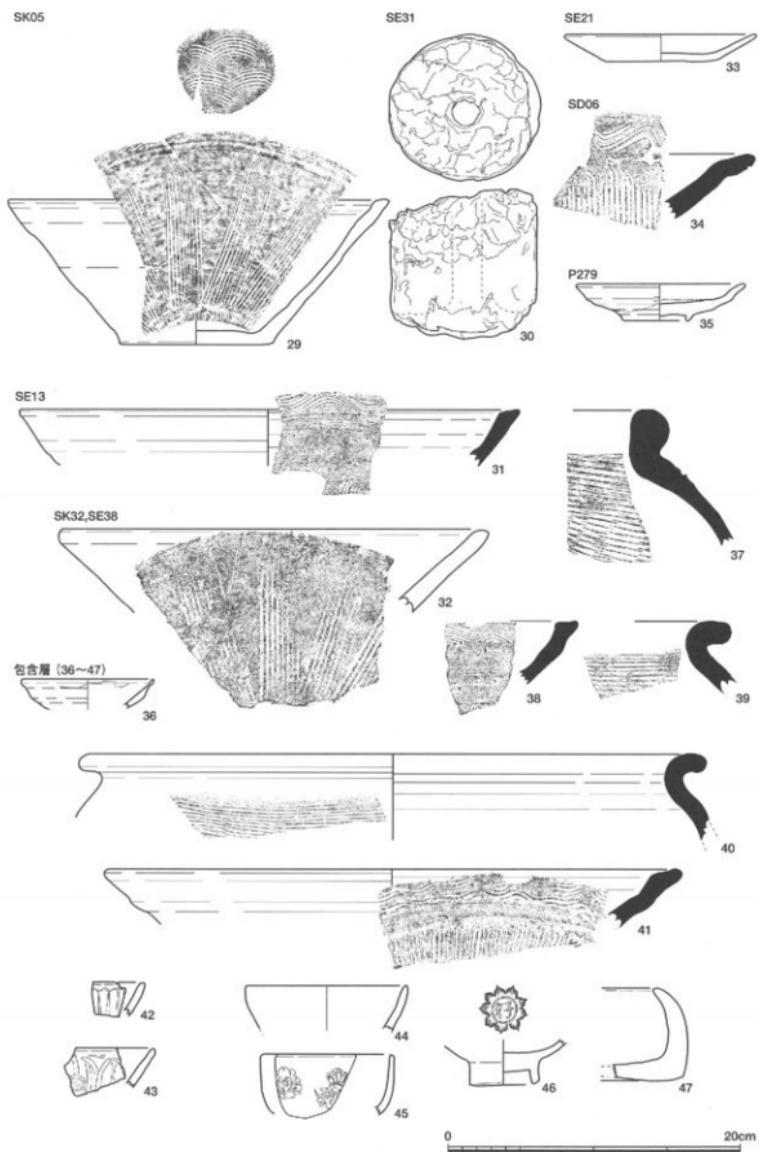
第8図 17地区の遺構 (4) (1:60)



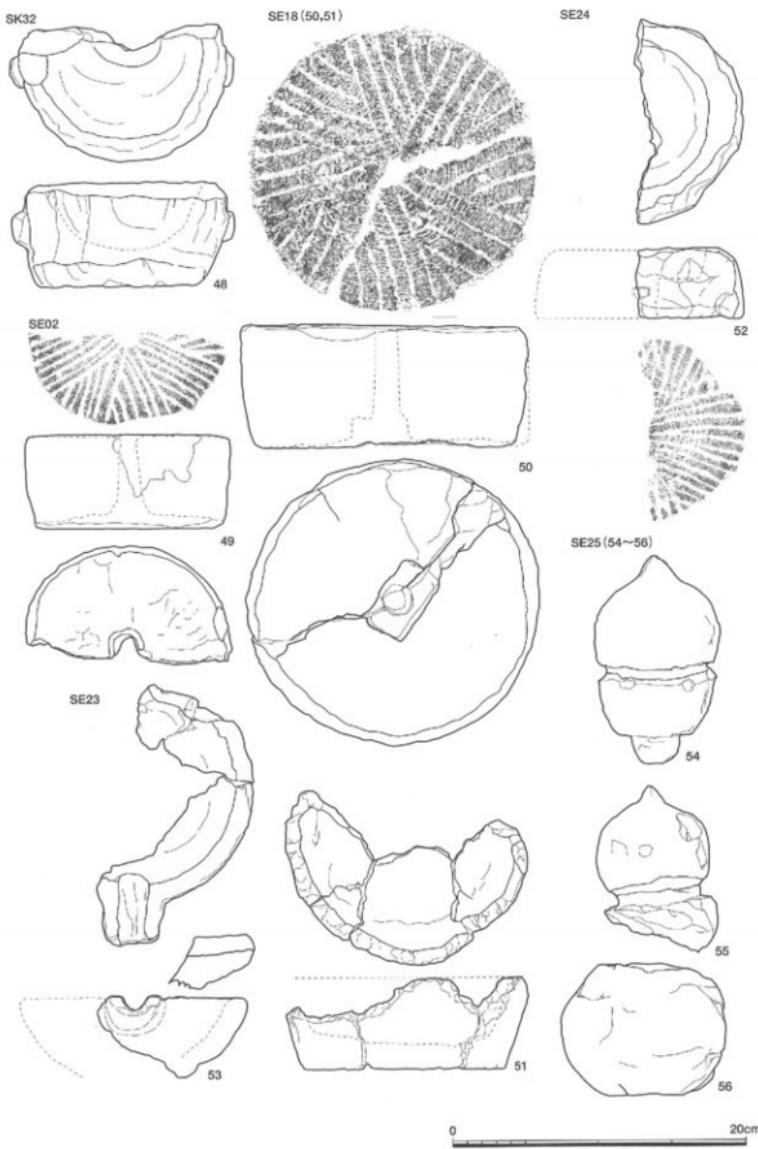
第9図 17地区の遺構 (5) (1:80)



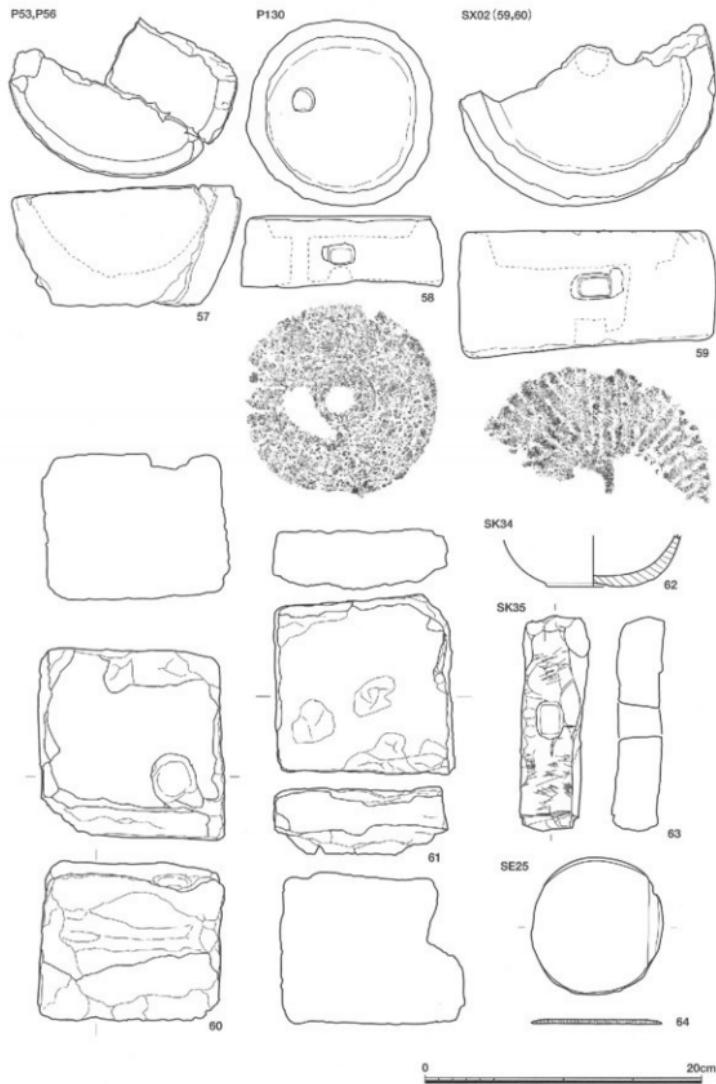
第10図 17地区の遺物 (1) (26は1:4、そのほかは1:3)



第11図 17地区の遺物 (2) (29、40は1:4、そのほかは1:3)



第12図 17地区の遺物 (3) (1:6)



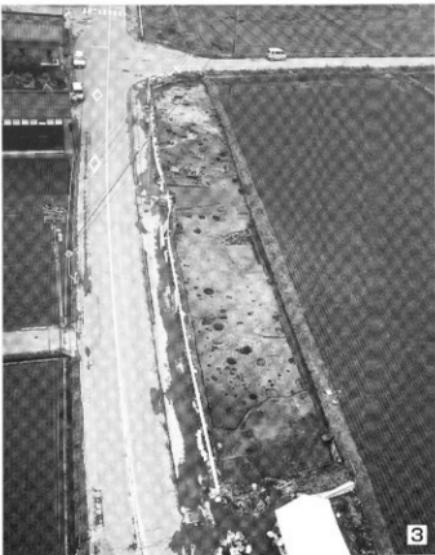
第13図 17地区の遺物 (4) (62は1:3、そのほかは1:6)



1



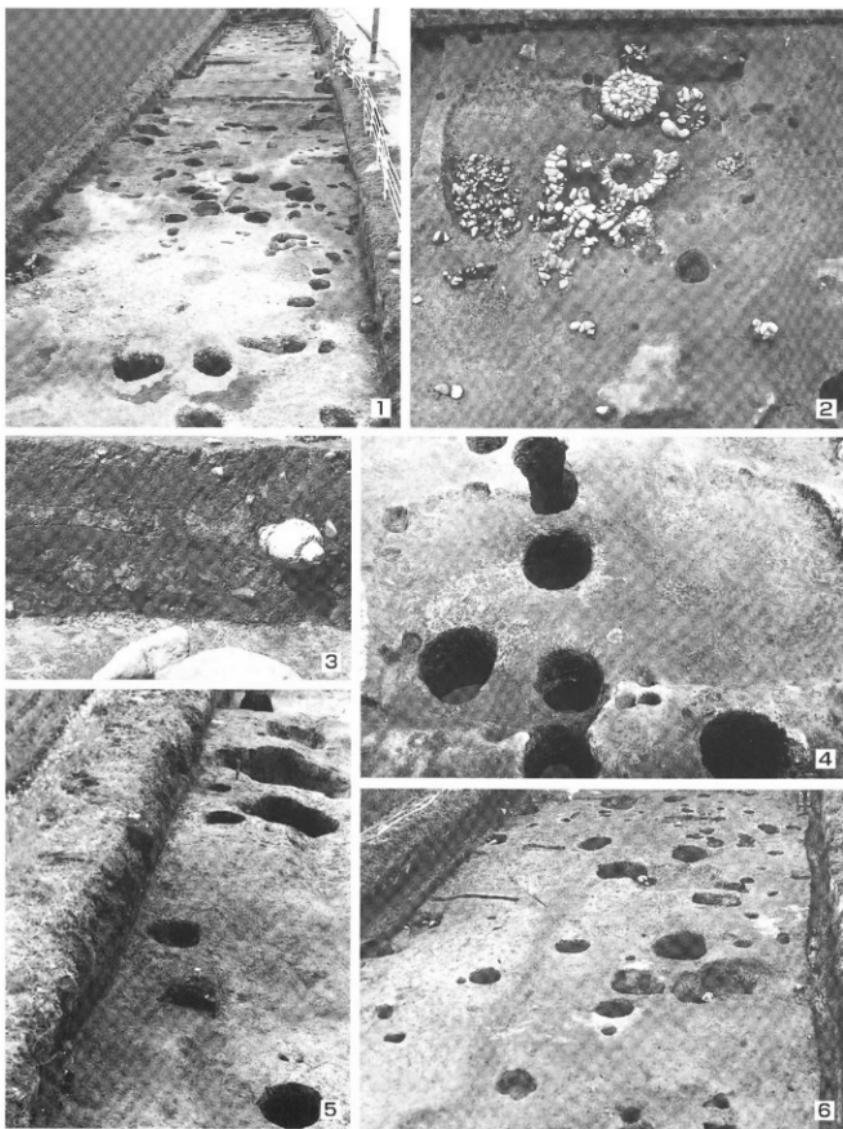
2



3

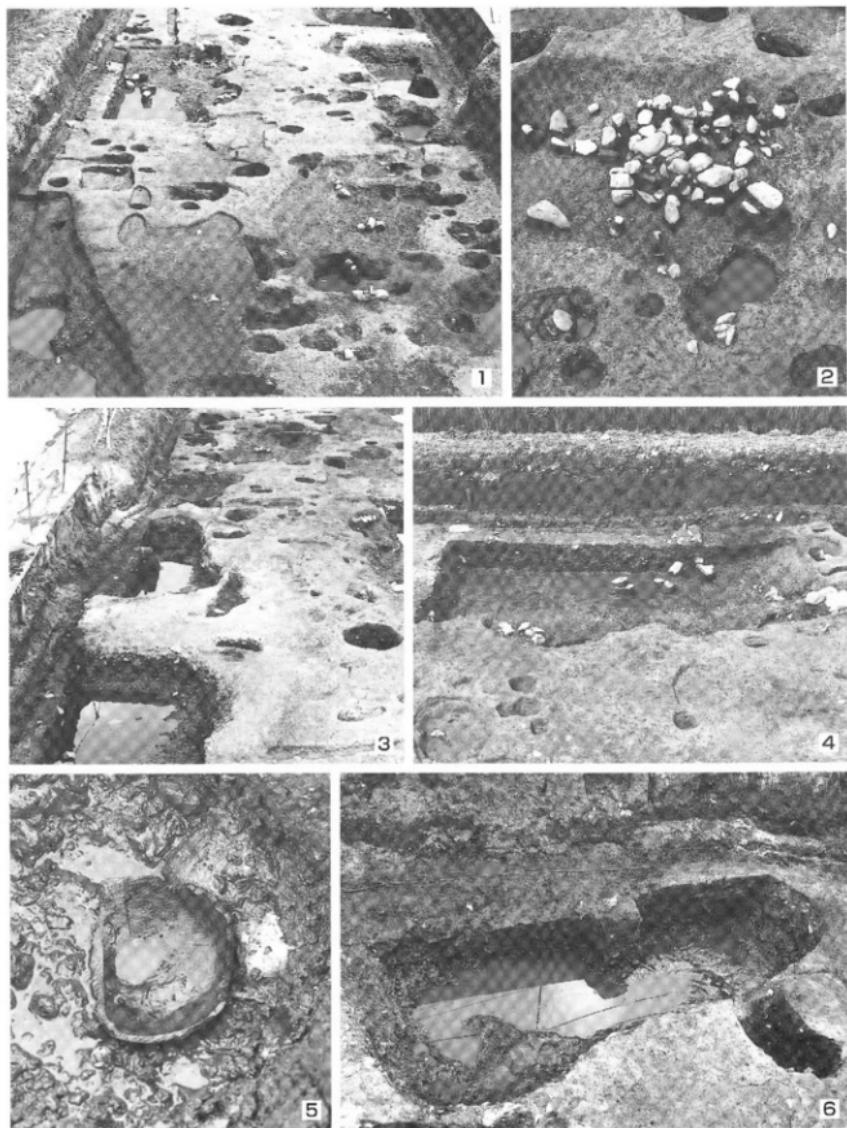
図版1 17地区の遺構 (1)

1.遠景（東から） 2.調査区全景（西から） 3.Y60～Y95部分（東から）



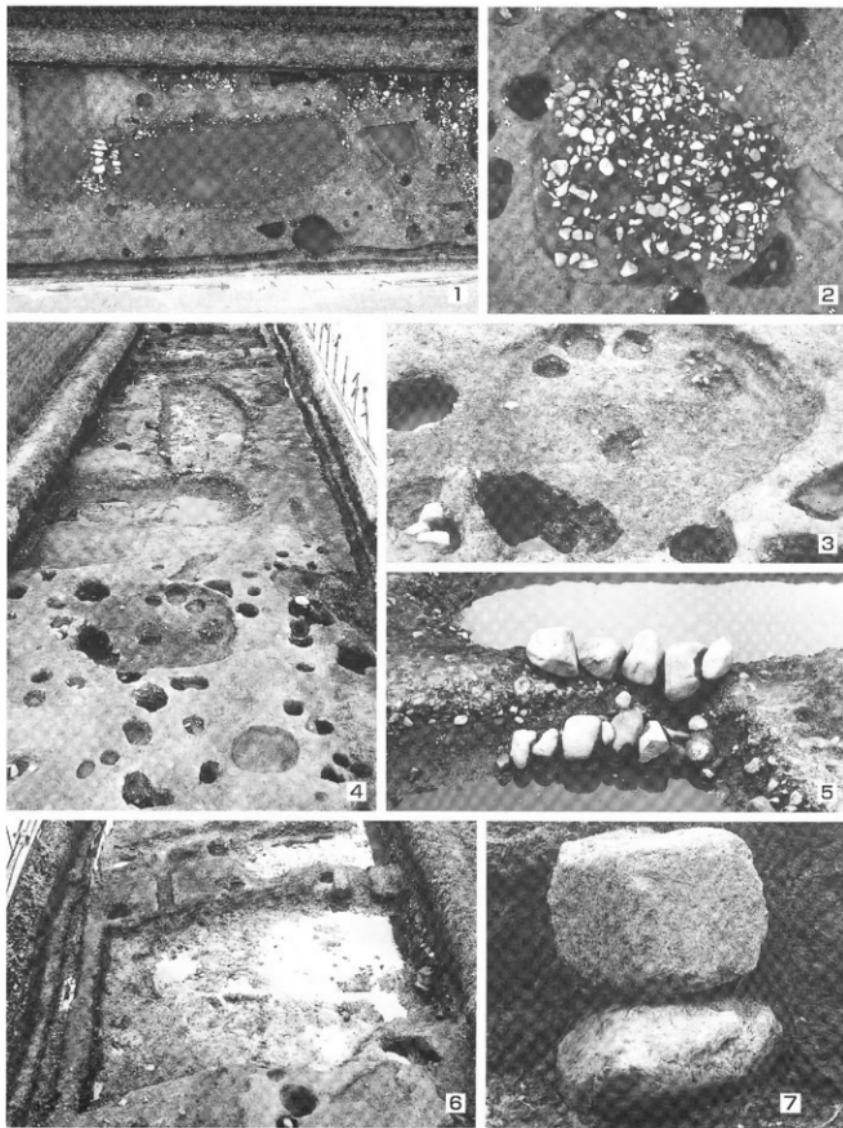
図版2 17地区の遺構 (2)

1.Y60～Y95部分（西から） 2.SK14～19付近（北から） 3.SK18・SE25土層（南から）
 4.SK18・完掘状況（南から） 5.SB01（西から） 6.Y85～Y90部分（西から）



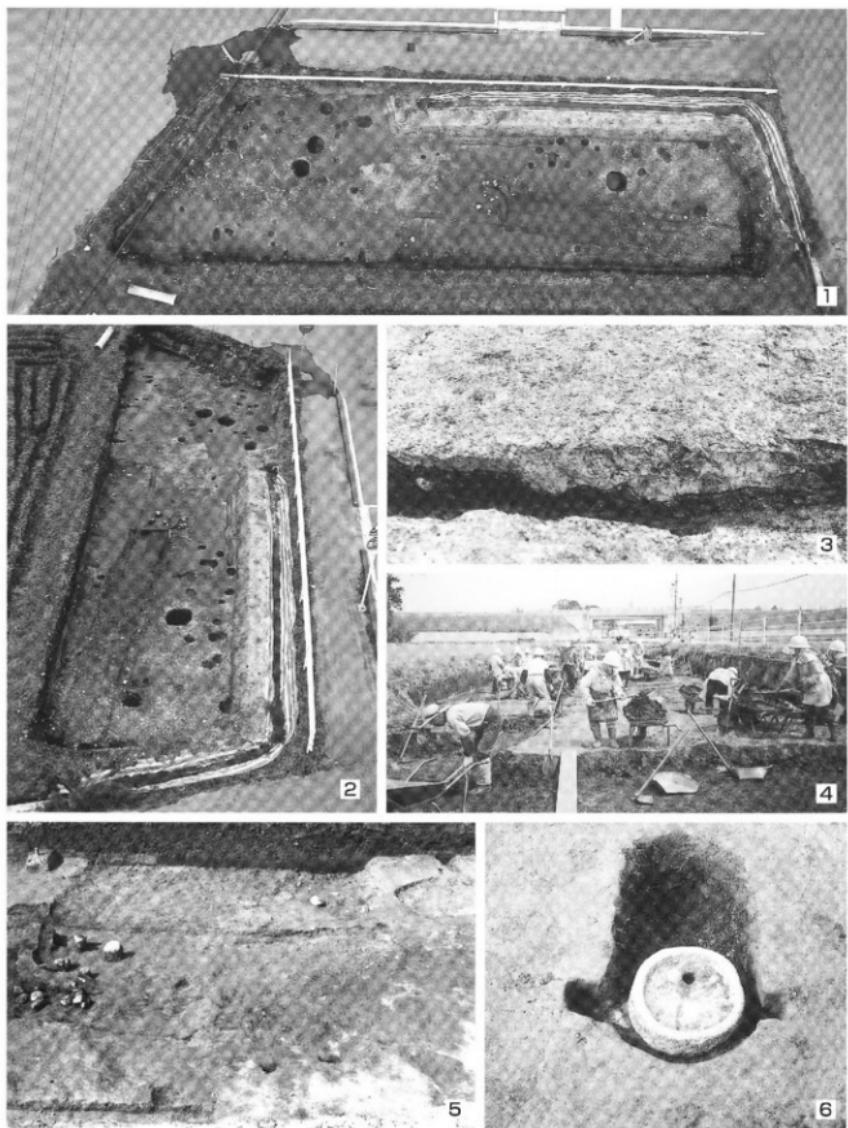
図版3 17地区の構造(3)

- | | | |
|----------------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|
| 1.Y95～Y109部分（西から）
4.SK34（北から） | 2.SK36付近（南から）
5.SK34漆椀出土 | 3.Y109～Y100部分（東から）
6.SK37（北から） |
|----------------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|



1.Y116～Y128部分（上空から） 2.SK31
4.SK31・完掘状況 5.SX01石列（東から） 6.SX02・磁石出土状

図版4 17地区の遺構 (4)



図版5 17地区の遺構 (5)

1.Y40～Y55部分

4.作業状況

2.Y40～55部分（西から）

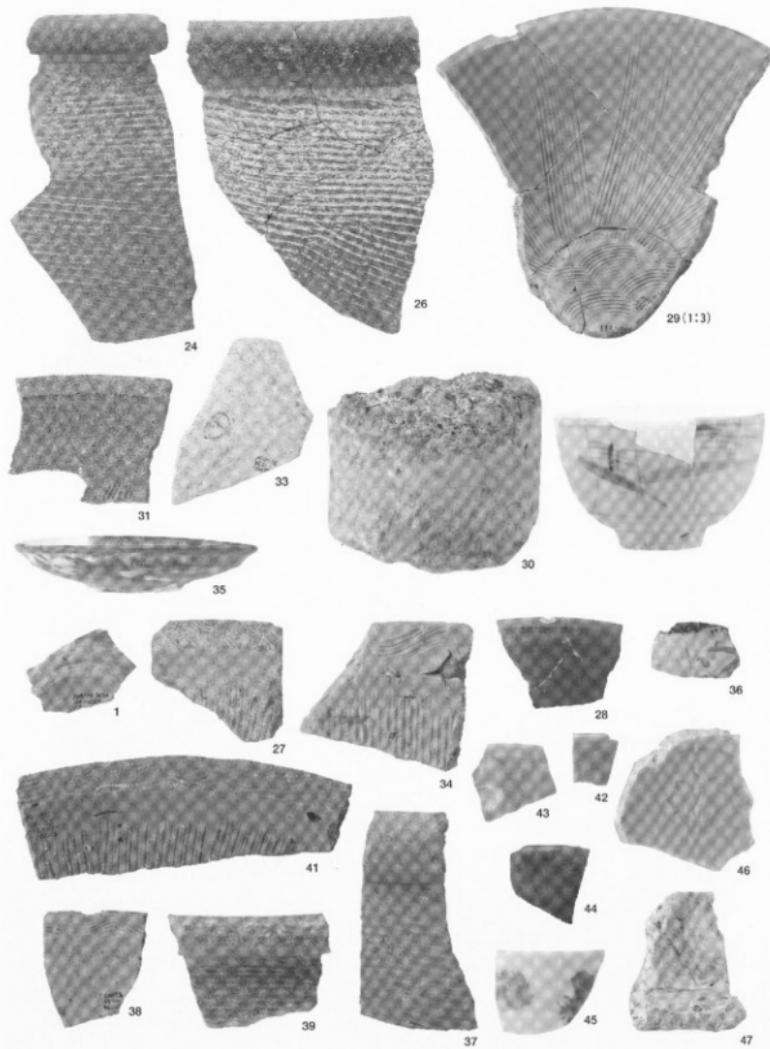
5.SD03・04土層（南から）

3.SD03・04・05断ち割り

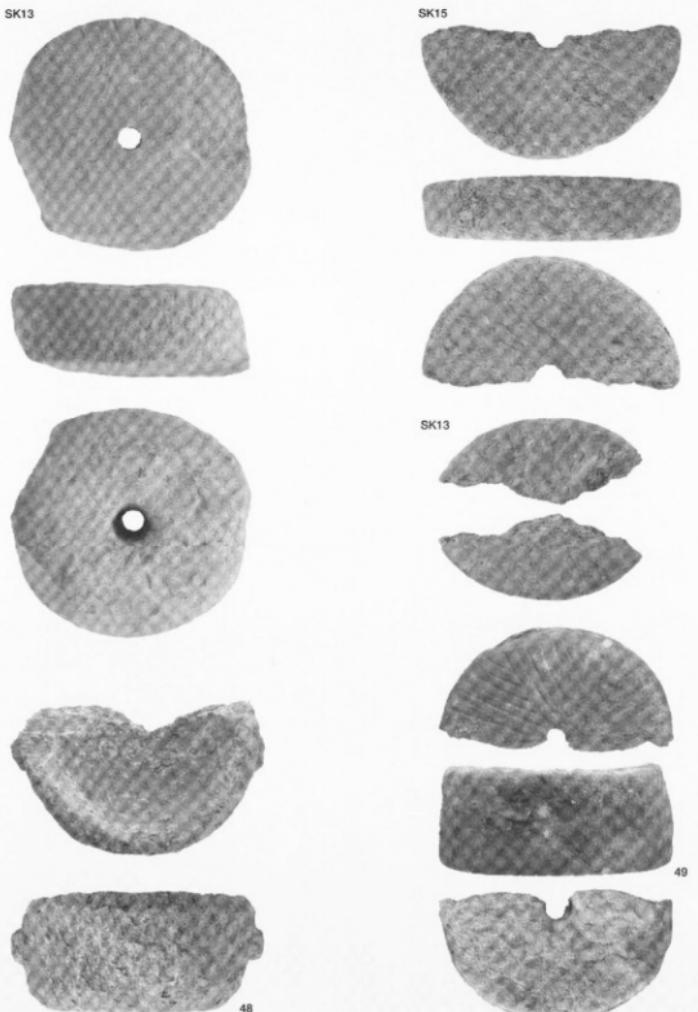
6.P130石臼出土状況



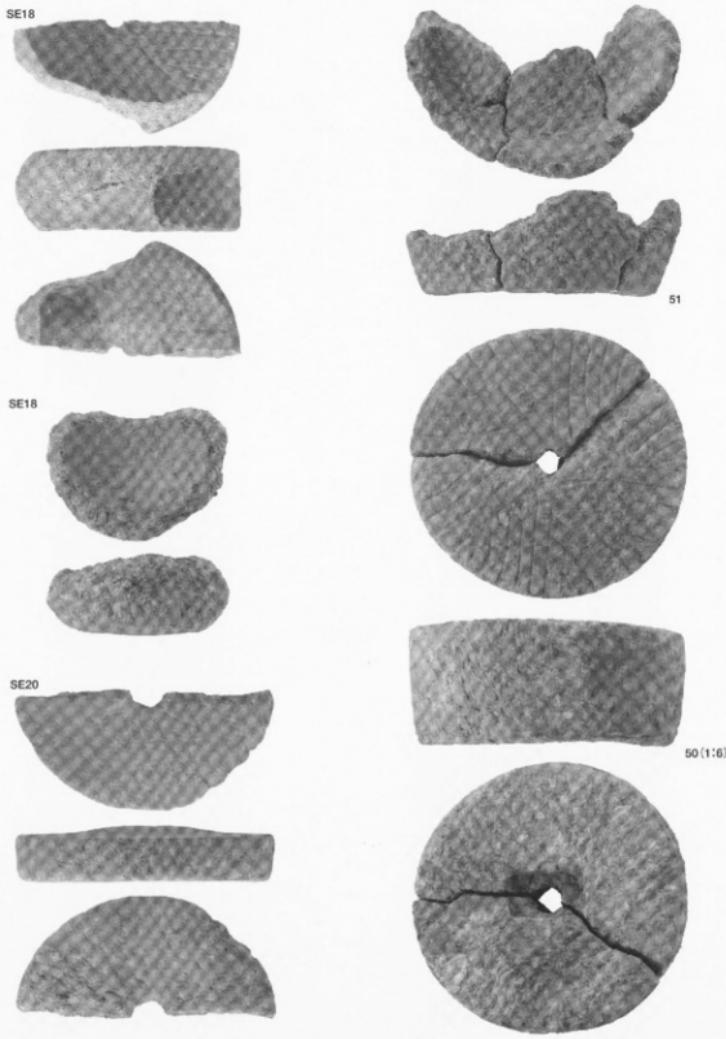
图版6 17地区出土遗物 (1) (1:2)



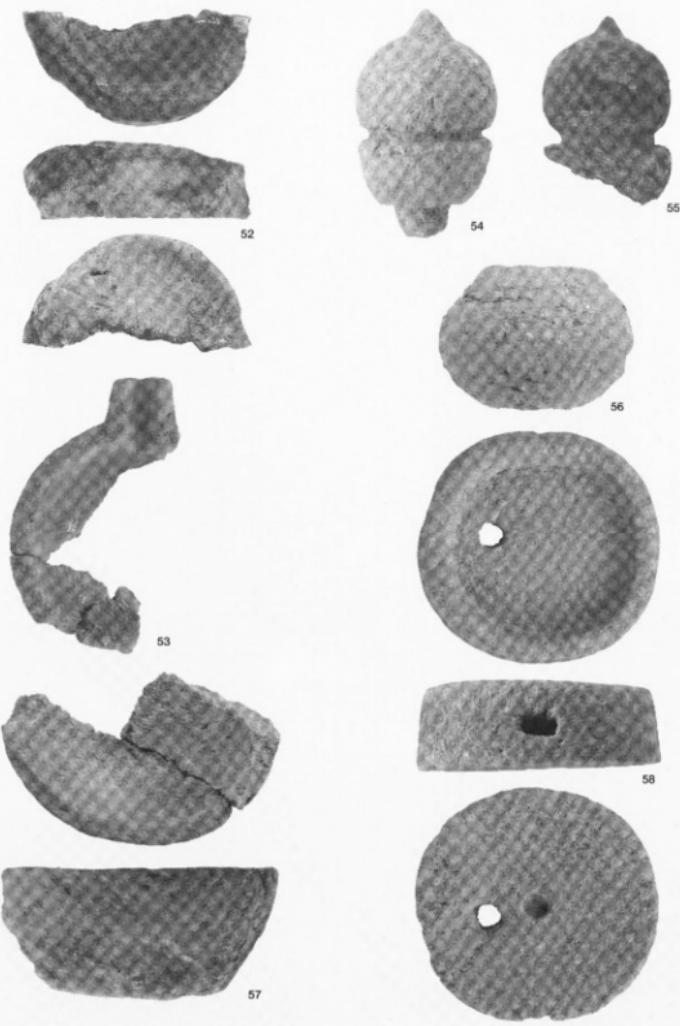
図版7 17地区出土遺物(2) (1:2)



図版8 17地区出土遺物(3) (1:5)

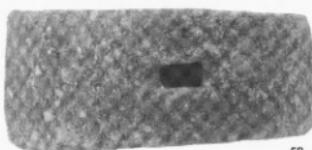
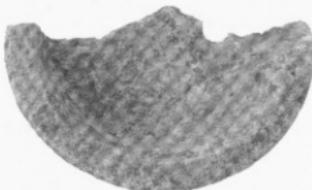
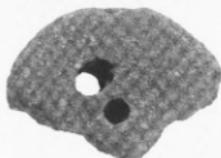
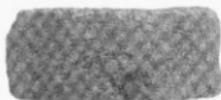


図版9 17地区出土遺物 (4) (1:5)

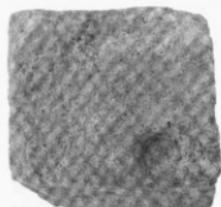


图版10 17地区出土遗物(5) (1:5)

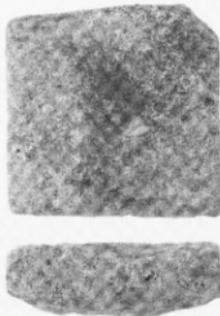
P173



59

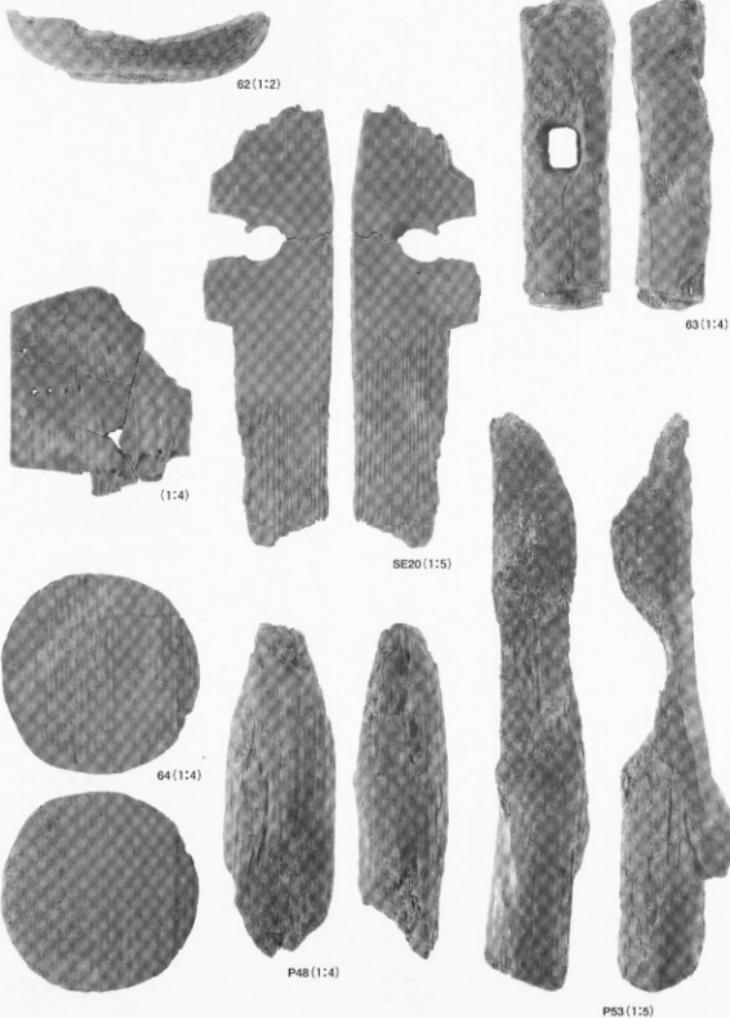


60



61

图版11 17地区出土遗物(6) (1:5)



図版12 17地区出土遺物 (7)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまち うめはらごまどういせき							
書名	富山県福光町梅原胡摩堂遺跡							
副書名	主要地方道金沢井波線道路改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)							
編著者名	佐藤聖子、深田亜紀							
編集機関	富山県福光町教育委員会							
所在地	〒939-1692 富山県西礪波郡福光町荒木1550 TEL(0763)52-1111							
発行年月日	西暦1999年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因		
うめはらこまどり 梅原胡摩堂	とやまけん 富山県 ふくみつまちうめはら 福光町梅原	16421	180 36度33分 20秒	136度54分 20秒	980409 ～ 980707	1,330m ²	県道改良	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
梅原胡摩堂	集落	奈良・平安時代 中世、近世	掘立柱建物、土坑 井戸、溝、ピット	須恵器 中世土師器、珠洲、青磁、 白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸 土師質土器、唐津、鉄滓、 フイゴ羽口、錢、漆器梶、 建築部材、桶底板、柱根、 五輪塔、ひき臼、茶臼、 石鉢				

主要地方道金沢井波線道路改良工事
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)

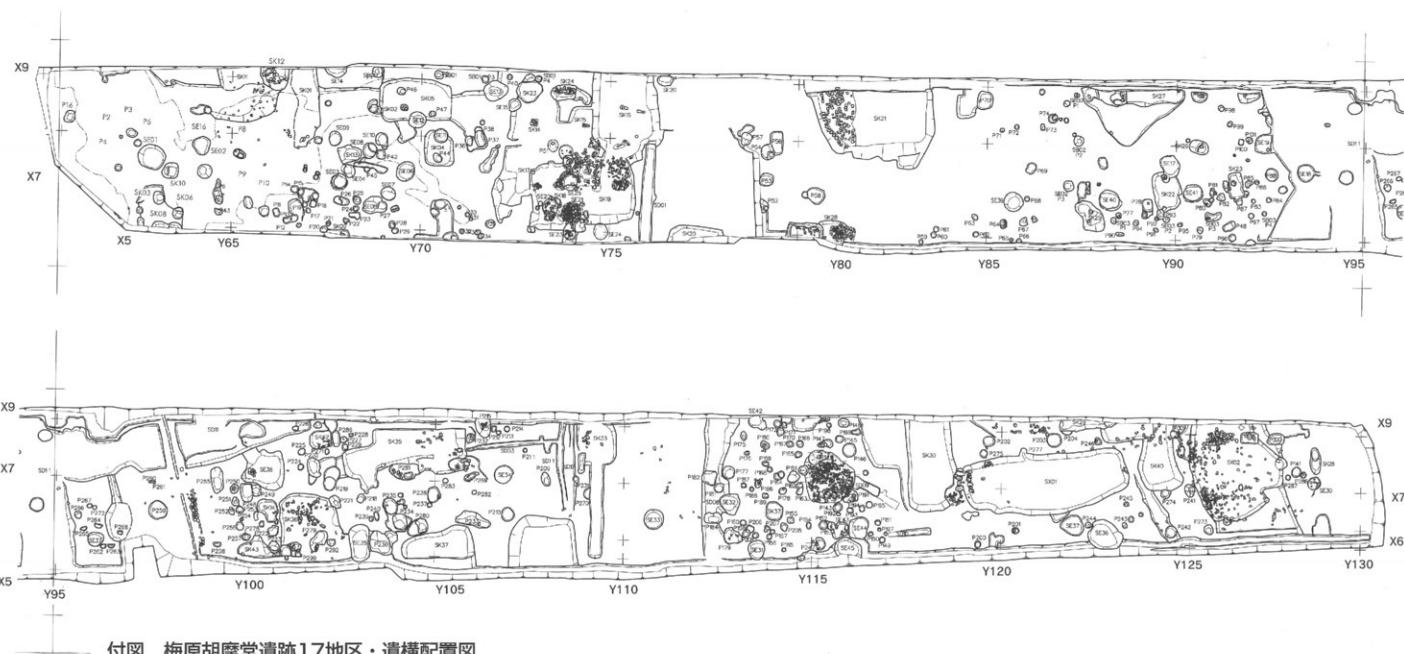
富山県福光町梅原胡摩堂遺跡

平成11年3月23日

編集 福光教育委員会

発行 福光教育委員会

印刷 砺波印刷



付図 梅原胡摩堂遺跡17地区・遺構配置図

